

教員活動状況報告書

提出日： 令和 5 年 3 月 9 日

所 属： 獣医学部 動物応用科学学科

氏 名： 山本 蒼士 職位： 准教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

2022 年 4 月に動物応用科学科野生動物学研究室の専任教員として着任して以来、野生動物学分野に関わる教育・研究活動に従事してきた。2022 年度は学部で 9 科目、大学院で 4 科目を担当した。教育においては単に知識を教えることのみならず、学生自身が考える力を培うことで、課題解決に対する応用力に繋がるように意識している。また、野生動物学野外演習や卒業論文では、野外フィールドで動物達が生きている環境に実際に身を置くことで、座学で学んだ知識を学生達が実感できる機会をもてるように努めている。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
基礎野生動物学	動物応用科学科	必修	2 年	126
野生動物学	動物応用科学科	選択	3 年	80
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1 年	150
動物人間共生論	動物応用科学科	必修	1 年	151
動物応用科学実習	動物応用科学科	必修	1 年	154
野生動物学野外演習	動物応用科学科	選択	3 年	46
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3 年	10
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1 年	34
進化・分類学	動物応用科学科	選択	2 年	39
野生動物学特論 I	動物応用科学科	選択	修士 1,2 年	6
野生動物学特論 II	動物応用科学科	選択	修士 1,2 年	5
動物共生科学特別研究 II-I	動物応用科学科	必修	修士 1 年	1
動物共生科学特別演習 II-I	動物応用科学科	必修	修士 1 年	1

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

教育では、物事に対して「なぜ？」と考える追求心や探究心を持った人材の育成を目標としている。近年はインターネットで調べることで容易に情報にアクセスすることができる一方、表面的もしくは雑学レベルの知識習得に留まることが多いと感じている。物事の理

由やメカニズムといった本質まで理解することで応用力に繋がり、疑問に思うことで新たな気付きが生まれる。そのようなサイクルを習慣化することで、多角的かつ多面的に物事の繋がりを意識することができ、自主的な学習姿勢および幅広いかつ実践的な知識・技術の獲得に繋がると期待している。また、進化・分類学の授業では、大学内にある博物館を活用し、実際に標本を見ながら解説することで、座学で学んだ知識の昇華を試みている。

研究においても、調査が単なる作業にならないよう、なぜそれを調べているのか、それを調べることがどのように分野に貢献するのか等を常に考えるように促すことで、物事を俯瞰する意識の涵養に努めている。また、野生動物の研究は一人では実施することが難しく、現地の人々をはじめとした様々な協力が必要不可欠である。そのことを私自身の体験談を交えて説明し、何事においても人に対して真摯であることの重要性を理解し、実践してほしいと考えている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方、方法）

大学では一般教養や専門分野に関する幅広い知識を学ぶが、それぞれの知識を多角的・多面的に関連づけて考え、課題解決に応用するためには、単なる暗記に留まらない「理解」が必要である。そこで、授業や実習では学生に問いかけることで物事に対して疑問をもつ姿勢を示すとともに、少し冗長になってしまうこともあるかもしれないが、現象の理由やメカニズムなどについて詳しく説明するように努めている。疑問を持つことで物事を深く理解することができ、そこからまた新たな疑問が生じる。そのサイクルを楽しむことができれば、自主的な学びに繋がると期待している。特に、実習や卒業研究で野外フィールド等に出た際には、課題を与えずに自然や動物をゆっくり眺めてもらう時間を学生に与えることで、自身で様々な不思議や疑問に気付くことができる機会を意識して取り入れている。

また、可能な限り学生と日常的にコミュニケーションをとるように努めている。教員との信頼関係を築くことで、間違えた回答や議論することを恐れず、学生の自由で柔軟な考え方を促すことができると感じている。そして、質問や疑問に対して単に答えを与えたり、正したりするのではなく、まずは学生自身の考えを引き出し、一緒に答えを導き出すことで達成感や自己肯定感を高めていきたいと思っている。考えるという作業は最初の頃はとても大変で難しいことである。しかし、それを乗り越えることができれば、きっとどのような分野の業種においても、彼らが活躍していく力の一つになると信じている。一方、私自身も学生の模範となれるよう、常に考えることを楽しみながら研究や教育に取り組む姿勢を心掛けている。

アクティブラーニングについての取組

1 年生の基礎ゼミでは、学生間の議論と課題発表および質疑応答を課している。また、その他の授業では唯一の回答があるわけではない問題をアンケート等で掲示し、類似回答をいくつかに分類して、それらについてみんなで考える機会を設けている（添付資料①）。一方、100 人を超える授業でのグループディスカッションについては、成功事例などを参考にして今後検討・導入していきたい。近年では学生もリモートツールの使い方に慣れて

きたと思うので、オンライン上でグループを作成して議論するなど、いくつかの実践可能性を感じている。また、授業以外にも R ソフトウェアの使い方に関する自主ゼミを企画して学びを支援することに加え、学生達で互いに教え合うことで理解が深まるように取り組んでいる。

ICT の教育への活用

授業資料にワンクリック URL や QR コードを埋め込むことで、内容についてさらに学べる情報や関連動画を掲載している（添付資料②）。また、オンライン匿名質問ツールを活用し、授業中にリアルタイムで学生が質問できるように工夫している（添付資料③）。さらに、授業資料を事前に、授業動画を事後に学理にアップロードすることで、予習と復習ができるように努めている。一方、学生とのやり取りには Google チャットを積極的に活用し、より気軽に学生が質問しやすくなるようにしている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

※ A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

① 教育（授業、実習）の創意工夫（A）

授業資料は可能な限り文字を少なくし、重要なポイントを強調するなど、視覚的に見やすくなるように努めている。また、授業時間だけでは説明しきれない部分の補足もしくはさらに深く学びたい学生のために、資料を別に作成し、Google drive の共有リンクを資料に貼り付けることで充実した学びを提供している。さらに、一方的に聞いているだけの受け身の授業にならないように、配布資料の随所を空白にして、授業を聞きながら書き込むことで資料が完成するように工夫している。そして、毎回の授業は録画し、必ず学理にアップロードすることで復習できるようにしている。

授業開始直後は学生も集中力がないため、最初にアイスブレイクとして当該回の授業に関する時事ネタや最新の話題などを話している。なお、メリハリをつけるため、時限間の休憩は必ず取ることに加え、集中が途切れていそうな時には適宜数分間のストレッチ休憩を取り入れている。また、どうしても長時間の集中は続かないため、理解度確認のための小テストや関連動画を効果的に活用している。

② 学生の理解度の把握（B）

授業ではほぼ毎回 Google form を活用した小テストを実施している。また、学生の回答結果（匿名）を授業内でフィードバックすることで、全体的な理解度を共有し、各自が全体と比較した自身の状況を把握できるようにしている。一方、小テストの正解率に応じた個別の学生ケアまでは実施できておらず、今後は適宜、個別の補足指導を検討している。

③ 学生の自学自習を促すための工夫（B）

関連する情報や補足資料、動画など、授業資料に埋め込み URL および QR コードを掲載す

ることで、授業内容について一歩進んで学べる機会を提供している。ワンクリックで容易に情報にアクセスすることができることから、学生も積極的にリンク先の内容を確認してくれているようである。しかし、授業評価アンケートでは授業時間外学習が30分未満の学生も一定数いたため、補足資料も含めて授業が完成するように期末試験や課題を出す工夫の必要性を感じている。

④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A)

疑問を持ったまま授業が進行しないよう、匿名質問ツールを活用し、授業に関する質問を学生がリアルタイムで投稿し、随時回答するようにしている。また、課題に対する学生の回答例や質問の一部は翌週の授業開始時に取り上げて詳しく解説することで、参加意識を持ってもらうようにしている。実際に、きちんと質問に対応してくれたことが嬉しくてモチベーションが上がったとの感想を得た。授業時間外の質問に関しては、対面やメール、学理への回答掲載で随時対応しており(添付資料④)、リスポンスがあることで学生からの質問が積極的であった。一方、理解度が芳しくないが、積極的に質問してくれない学生とのコミュニケーション方法については、今後検討する必要があると感じている。

⑤ 双方向授業への工夫 (A)

匿名質問ツールを活用することで、講義が一方的にならないように工夫している。だが、人前で発言をすることも重要であると考え、こちらから学生に問いかけるなど、今後はより活発に学生が発言や口頭質問をできるように工夫して取り組んでいきたい。

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか

該当なし

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか

概ね高評価であった。特に、匿名質問ツールを活用することで、授業中にリアルタイムで質問ができる点は学生に好評であった。一方、少し説明のスピードが早いという意見があった。この点については自分自身でも自覚があったため、以後の授業では話す速度を遅くするとともに、次のスライドに行く前に少し間を置くように努めた。

② ①の結果はどうでしたか

着任初年度の前期の授業に対する評価であったため、後期の授業評価についてはまだ不明である。授業内で学生に質問したところ、説明が早いという点は改善されているようである。今後も授業評価を参考にし、随時改善していきたい。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

説明速度が早いという点に加え、授業時間外学習が30分未満の学生が一定数いた。そのため、次年度は補足資料も含めて授業が完成するように工夫しようと考えている。これまで補足資料の参照は学生の自主性に任せていたが、授業内でもリンクにアクセスし、要点を説明するようにしたい。また、授業終盤の授業評価のみならず、学生の感じていることを定期的にアンケート等で確認することで、可能な限り適宜改善していきたい。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか

以前に、教員とコミュニケーションを取ることで授業への参加意識が高まり、成績が向上した例があった。そこで、授業に関しては、小テストの結果から成績の芳しくない学生を把握し、まずは授業前後に積極的に話しかけることでコミュニケーションを取りたいと考えている。そして、彼らが抱えている問題や課題の理解に努めたい。また、他の教員に実践方法を聞くことで、積極的に対策を取り入れていきたい。

卒業研究に関しては、専門ゼミは毎週実施しているものの、研究室生の人数が多いため、各人の発表機会が少ない。今後はより積極的に学生とコミュニケーションを取って現状を把握し、それぞれに達成可能な課題を与えることで、当事者意識と計画的に物事に取り組む意識を培っていきたいと考えている。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

2022年度前期の授業評価から一部抜粋（添付資料⑤）。また、同僚の教員からも、授業に対する学生の評判が好評であると伝え聞いている。今後もさらなる満足度の向上を目指したい。

- ・ 動画があって楽しかった
- ・ スライドの内容が分かりやすく、理解しやすかった
- ・ 資料が豊富だった
- ・ 学生が質問しやすいように工夫してくれていたため、質問しやすかった
- ・ 授業中に匿名で質問できる Slide を用いていて良かった。毎回授業録画を公開してくださったので復習ができて良かった
- ・ 中間レポートのような自分の頭の中でまとめられる機会をいただいた点
- ・ 配布資料に論文のリンクなどが掲載されていて、興味が沸いた内容についてさらに調べてみようと思えた。
- ・ 資料がわかりやすかった
- ・ 実際の映像などを載せるなどして分かりやすく説明できていた
- ・ スライドは細かく授業では詳しく教えていただき、授業中にも質問ができるよう QR コードを利用したチャットを開いていただいていたため質問しやすい環境であった
- ・ 授業内で行われた計算問題はあっていれば加点し、減点はしない方式が生徒のやる気をかきたて良いと感じた

- ・ 授業スライドが見やすく、スライドに沿って授業していたので分かりやすかったです
- ・ 興味のある分野だったのもあって、楽しく聞けたし、個体別の性質からの繋がりや環境との関係まで幅広く知ることができてよかった
- ・ スライドに図などを使って丁寧に説明が書いてあり、理解しやすかった
- ・ スライドに QR コードがあり、随時質問ができるシステムがあったこと
- ・ 動物の動画を流しながらの授業が面白かった
- ・ 写真や動画、グラフなどが講義資料に多く入れられていたため理解がしやすかった

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

大学で開催されるFD 研修会等には積極的に参加していることに加え、様々な学習方法や学習支援ツールについて情報収集することで、指導力向上に努めている。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

授業や研究指導において、単に回答を与えるのではなく、学生自身が考えて解決策や意義の理解に達するよう誘導し、論理的思考力の習得およびその楽しさを実感できるように努めたい。そのような地力を培うことで、学生が様々な分野の社会で活躍できる人材になるように願っている。

一方、本年度着任したばかりで少し慌ただしく、落ち着いて研究に取り組むことができなかった。自身の研究にもしっかりと取り組み、その一部を学生と一緒に実施することで、彼らの研究力も培っていききたい。また、最新の研究成果の授業・教育への還元に加え、私自身が分野を開拓することで、学生の卒業後の進路を切り開いていきたいと考えている。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

添付資料① Google Meet のアンケート機能を用いたリアルタイム回答の例

添付資料② 授業スライドに掲載した補足情報の埋め込み URL の例

添付資料③ 匿名質問ツール（Slido）の Q&A

添付資料④ 学理に掲載した授業内容に関する質問への回答例

添付資料⑤ 授業評価アンケートの結果